平成 29 年度公開講座 SDGs 教育フォーラム　実施報告書

1. 実施概要

・名　　称　　公開講座「SDGs (*1) 教育フォーラム＠トヨタ白川郷自然学校」

*1　SDGs とは「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称である。2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟 193 か国が 2016 年～2030 年の 15 年間で達成するために掲げた目標である。

・開催日程　　2018 年 11 月 4 日（日）～11 月 6 日（火）3 日間

・開催場所　　トヨタ白川郷自然学校

・主　　催　　SDGs 教育研究会

・共　　催　　日本環境教育学会「SDGs の教育」研究会、立教大学 ESD 研究所

・協　　力　　トヨタ白川郷自然学校

・開催趣旨　　ESD の発展形もしくは実践型としての「SDGs の教育」を深化させるための研究と実践をつなぎ、特に若手研究者の交流の場を設けるために 2 泊 3 日で実施。講師 3 名を招き、SDGs の実情、最新の情報を学ぶ。

・対 象 者　　学生、研究者、企業、教職員、省庁及び自治体職員、農林漁業従事者、NGO/NPO 関係者、オルタナティブ教育（フリースクール、自然学校など）の関係者など

・参加者数　　延べ 89 名

・実施内容（当日スケジュール）

11 月 4 日（日）	17:00	開会式、懇親会
11 月 5 日（月）	8:30	自然學校のプログラム体験
	10:00	白川郷世界遺産の見学
	13:00	講演①「SDGs の視点からみた生物多様性」
	15:00	講演②「白川村の未来の担い手を育てる白川郷学園の教育」
	19:00	まとめ
11 月 6 日（火）	10:00	講演③「ソーシャルデザインとコミュニケーション」
	13:00	自然學校解散

2. 講演要旨・感想

【講演①】

「SDGs の視点からみた生物多様性」

講師

日経 BP 社 日経 ESG 経営フォーラム シニアエディター

藤田 香 氏

出身は富山県ですが、地元に居た頃は自然には興味はありませんでした。大学でクライミングが趣味になり、それが高じて海外で地質研究、現在は経済畑にいる私です。しかし SDG's は昨今経済界では大変重要視されていて、今の仕事と大きく関わっています。
今、経済界では SDG's と ESD という二つの言葉が時代の鍵だと言われています。

ESD とは、環境（Environment）、社会（Social）、ガバナンス（Governance）の頭文字を取ったものです。今日、企業の長期的な成長のためには、ESG の 3 つの観点が必要だという考え方が世界的に広まってきています。ESG の観点が薄い企業は、大きなリスクを抱えた企業であり、長期的な成長ができない企業だと見られる考え方が、企業の株主である投資家の間で急速に広がってきています。ESG は企業の価値を評価する指標として、SDGs は評価のための共通言語になりつつあり、SDG's に基づいた事業戦略を打ち立て、積極的に発信する企業も増えてきました。プラスティック製品の使用の中止、再生エネルギーの開発など、世界の潮流は「脱炭素」「非化石化」に向かっています。

「RE100」という国際イニシアチブをご存知ですか。事業運営を 100%再生可能エネルギーで調達することを目標に掲げる企業が加盟するイニシアチブで、「Renewable Energy 100%」の頭文字をとって命名されています。加盟するには、事業運営を 100%再生可能エネルギーで行うことを宣言しなければなりません。多くの現加盟企業は、100%達成の年を同時に宣言しています。100%達成は、企業単位で達成することが要求され、世界各地に事業所がある企業は、その全てで 100%を達成しなければなりません。
「再生可能エネルギー」とは、水力、太陽光、風力、地熱、バイオマスを指し、原子力発電は含みません。様々な分野の企業 144 社が加盟していて、日本はソニー、リコー、富士通、イオン、丸井グループ、積水ハウス、大和ハウス、他にもアスクル、ワタミなどが加盟しています。
このように、生物多様、自然資本経営は SDG's に貢献できる部分が多いのです。

【感想】

・企業における SDGs の動向が分かって面白かった。日本企業のあり方もどんどん変わっていくのだろうと思う。（そう期待したい）海外の取り組み事例についても 1，2 件詳しく聞きたかった。

・データでこれだけはっきりと見せられると、世界の流れがわかった。藤田先生の資料の多さに感動した。短い時間で内容の濃いお話で、これからひとつひとつ調べていこうと思った。

【講演②】

「白川村の未来の担い手を育てる白川郷学園の教育」

講師

白川村立白川郷学園校長

水川 和彦 氏

平成 29 年に従来の白川小学校と白川中学校が岐阜県初となる義務教育学校として開校。小中学校 9 年間の教育活動を一貫して行い、白川郷学園では 1～9 年生計 116 人が学んでいる。特色として村民憲章を元とするふるさと学習、9 年間一貫カリキュラムだからできる英語教育 SEE、様々な分野からの外部講師による特別授業が実施されている。

平成 26 年度から立ち上げたコミュニティスクール、平成 29 年度開校した義務教育学校としての仕組みを生かし、教育目標「ひとりだち」の要素となる「自立」「共生」「貢献」の 3 つの資質を 9 年間かけて育成する教育を展開しています。義務教育学校の最も大きな特色は、切れ目のない 9 年間の教育課程を一貫して実施できることです。このことは、教師側からすれば 9 年間の成長の階段をゆるやかで確実に実感を伴って子ども自身に登りきらせることができることを意味します。同時に、児童生徒からすれば、「自らの 9 年先を見通し、9 年前を振り返ることができる日常の学校生活がそこにある」ことが最大の特徴です。

また、9 年間一貫カリキュラムでは早い段階から教科担任制をとることにより、英語や音楽、図工といった専門性の高い教科について発達段階を意識した授業が進められるメリットがあります。児童生徒数 116 名に対し、33 名の教師がいることで 3.5 人の児童に対し 1 人の教師がいることで手厚いサポートができるのも義務教育学校のメリットでもあります。

ふるさと学習では村の人材をフル活用し、村民憲章を元として、段階的にふるさと白川村について学び 9 年生になった時に、村に対して自分が何をできるのかを提案することを目指し取り組んでいます。ふるさと白川郷の自然や歴史、伝統、文化、村の行財政の仕組みついて、各教科の学習と関連させて学んでいきます。また、人権教育、消費者教育といった課題の教育も関わらせながら、村の担い手を育てる学びを深めていっています。

【感想】

・斬新な取り組みだと感じ、また、先生の意欲と能力、地域の力を感じた。継続していくための人づくりが重要となると感じた。

・非常に興味深い教育実践だった。地域の協力を全面的に得ていることもそうだが、校長先生も大変意欲的な方で、驚いた。実際に小・中学生（と卒業生）が地元の白川郷のことについてどう感じているのか話を聞いてみたいと思った。来年度以降、実際に小学校を訪問する機会とかがあれば嬉しい。

【講演要旨③】

「ソーシャルデザインとコミュニケーション」

講師

一般社団法人 Think the Earth 理事

上田 壮一 氏

社会の無関心を解決することを目標として Think the Earth（地球的視野で考え行動する人や企業）を設立。宇宙飛行士のように宇宙から地球を見る感覚を提供する地球時計 wn-1 を開発する等、メッセージ性の高い商品開発プロジェクトとしてスタートしました。モノとしての高い完成度を目指しながら、同時に購入者がコトとしての Think the Earth に参加して、共に持続可能な社会を目指す学びや行動を始めることを目的としています。

その後、社会の無関心は徐々に改善されつつあり、特に東日本大震災以降、日本でも多くの人が社会や環境、そして未来に関心を寄せるようになりました。一方、世界では SDGs が作られました。最近の活動は、そうした関心をもった人達と、どこへ向かうのか？を問いに、長期的な視点で自ら考え、行動できる「ヒトづくり」へとシフトしています。

ヒトづくりの具体的な活動として行政、企業と協力して SDGs をテーマに教育活動や社会実験等を行っています。学校教育者向けに「未来の為に学ぶ」を意識した教材の制作や労働問題を社会に訴えかける社会実験等を実施しました。どちらも SNS 等を利用して人々が自発的に社会へと訴える活動へ繋がりました。これらの活動には、自分事と他人事の障壁を取り払い、「人は何故社会や環境問題が自分事にならないのか」という意識をもたせることが大切です。

SDGs 達成へのヒトづくりの活動には、問題のステージを意識し、最終的に社会変容を狙えるようなソーシャルデザインが必要です。そのために、まず問題を認知し、心を動かす心理変容、活動や行動を促す行動変容の段階を経る必要があります。「どのように言葉で伝えられないことを伝えるか」、「どのように人の心を巻き込むか」を意識し、個々人に留まらず、人々が自発的に活動を起こせるようなコミュニケーションを促すソーシャルデザインで SDGs を達成していきましょう。

【感想】

・広告業の観点から SDGs をとらえることに対し、最初は抵抗があったが、人の心を動かしてから、行動につなげるまでの手法として非常に参考になった。

・数々の映像が訴えるものがあった。自分が何を成すべきかを、気づかせてくださったのは上田先生のお話でした。まだまだ課題だらけですが、とにかく、一歩を踏み出せたと思います。このお話を聴くことができて、本当によかったと思う。

3. 今回の成果と今後の展望

日本環境教育学会「SDGs 教育研究会」代表・立教大学ＥＳＤ研究所長
阿部　治氏

本研究会は日本環境教育学会特設研究会として 2018 年 8 月に設置された。その意図は同学会の主要な研究テーマである ESD（持続可能な開発のための教育）が SDGs 推進のためのエンジンとして位置づけられることから、今後の SDGs 推進に向けて ESD の基本的枠組みと到達点を理解したうえで SDGs 実現に向けた教育の在り方について検討することである。

このような意図で発足した本研究会は定期的な非公開の学習会（書籍刊行を目指している）と公開学習会を行っている。研究会としての最初の公開学習会は 8 月に開催された日本環境教育学会年会における長沢恵美子氏（経団連）によるものであり、主に経済界による SDGs の取組を知ることができた。白川郷セミナーはこの企画に続く第 2 弾の公開セミナーであり、最先端をいく一流の講師陣を迎えた合宿形式による深い討論と参加者のネットワークの構築を意図する本研究会最大のイベントとして位置づけられている。

今回の参加者からのアンケート結果から、3 名（内、1 名は地元白川郷の ESD への理解を促すために白川村立義務教育学校校長を招聘、他 2 名は主に「自然資本・ESG の視点」からと「コミュニケーションとソーシャルデザインの視点」から SDGs にアプローチ）の講師陣への評価は極めて高く、企画の趣旨は達成されたといえる。意図したネットワークの構築についてもほぼ達成されたといえる。しかし、プログラム全体の時間的制約のために討議の時間が短く参加者同士の深い学びという点については若干の課題が残された。

また、白川郷という開催地のアドバンテッジも世界遺産地域の視察、トヨタ自然学校による環境教育プログラム（朝の散歩)、白川村立義務教育学校による白川郷学に触れることで最大限に発揮されたといえる。

次年度への展望としては学生がより参加しやすい開催時期が望ましいことから、11 月から 9 月の夏季休暇中に移し、深い討論ができるようなプログラム構成に変更することを計画している。今年度同様、最先端をいく一流講師陣を招聘し、トヨタ自然学校・白川村とのコラボを実現することで定番としての白川郷セミナーを構築すると共に白川村との社会連携にもつなげたいと考えている。すなわち白川村の持続可能な発展に寄与することも本セミナーの目的の一つに加えたい。また今回は実現できなかったがトヨタ自動車による SDGs を含む持続可能な社会への取組について拝聴する機会ができれば参加者によるトヨタ自動車への理解を促す一助になるのではないかと考える。